

## 内なる遠方

——アントナン・アルトーの旅行書簡について——

荻谷俊宣

### 1. 旅・病・手紙

1842年12月25日、ジェラルド・ド・ネルヴァルは東方旅行に出るために出港地マルセイユへ向かう途中、リヨンから父に宛てた手紙の中で次のように書いている。

昨冬は私にとって嘆かわしいものでした。衰弱で力を奪われ、無力さから来る憂鬱にどんどん満たされて、ひどい病気の後では哀れみしか呼び起こすことができないという気持ちから世間の楽しみさえ奪われてしまいました。その記憶を全て消し去り、人々の目に新しい容貌とともに私を示すような大きな試みによって、そこから脱却しなければなりません<sup>(1)</sup>。

前年発作に襲われたネルヴァルは、作家としての社会的地位を失っていた。彼のエジプトと中東への旅はただ憧憬の地を踏みしめることだけを意図していたわけではなく、長い距離を横断した後には慣れない異国の地でなお壮健に仕事を遂行できることを「人々の目に」証明することもまた目的としていた。東方に旅立つネルヴァルの姿は、それより百年近くが過ぎた1936年にメキシコへと旅立つアントナン・アルトーを想起させる。『チェンチー族』の失敗により「残酷演劇」の実現は袋小路に陥り、また長年彼を苦しめる病にも改善策を見出せないアルトーにとって、メキシコ旅行はこの窮境を脱するためのきっかけであった。旅行を準備するに当たって外務省からの特使の資格を得るべくジャン・ポーランに推薦状を依頼する彼は、手紙の中で自身の窮状を訴えつつ「私はまだ自分自身の道を探す必要があるのです<sup>(2)</sup>」と書く。『アントナン・アルトー、旅』の冒頭でフローランス・ド・メールディウは、アルトーの旅について「一言で言えばこの問題は私たちが二つの次元に置くことだろう。一つは地図上に位置づけることのできる現実の旅であり、もう一つは内的な想像上の旅である<sup>(3)</sup>」と書いているが、彼が旅先から書く手紙にもまたこの二重性を見ることができる。アルトーは『ジャック・リヴィエールとの往復書簡』以来、病の現実を伝えるための手段として手紙を利用したが、そこには彼の理想や欲望も投影される。旅が肉体に課す試練と彼が遠方に対して持つ理想は、この二重性をさらに強める。しかしアルトーにとって、病の治癒はこの二重性の解消であり、現実が理想に重なることに他ならない。そして彼

の旅行書簡はそのための特異な表現の場となるのであり、それは彼にとって決して成功だったとは言えないメキシコ旅行を経た後のアイルランド旅行で書かれた手紙において顕著になる。本論では、1920年代からアイルランド旅行までにアルトーが残した旅行書簡を通して、病と理想がその中でどのように表現されてきたかを見ながら、旅行書簡が彼においていかなる役割を担っていたのか考えてみたい。

あまり多くの記録が残っていない少年時代は別としても、青年期以降のアルトーは頻繁に旅行をしている。とはいえ彼の旅行のほとんどは旅そのものを目的とするものではなく、病気療養のためや、演劇の公演また映画の撮影といった職業上の理由からのものであり、病に苦しむ彼にとってみれば移動が体に強いる負担は決して喜ばしいものではない。たとえば、1922年8月に帰省中のマルセイユからおそらくは単なる転地のために隣県のキャヴァレールに出かけた際に、アルトーは恋人ジュニカ・アタナジウに宛てた手紙の中で「短い旅行でさえ、僕は調子を悪くして、魂を失くしてしまうんだ<sup>(4)</sup>」と言って嘆いている。彼は旅先から異郷の印象や心の高揚を書き留めた手紙をたびたび友人たちに送っているが、こうした記述にはいつもどこか病が影を落としている。

1925年6月に映画『グラジエラ』の撮影のために訪れたイタリア・プローチダ島から送られた手紙を見てみよう。プローチダに到着してすぐにジュニカに送った短い手紙<sup>(5)</sup>では、アルトーは真っ先に移動のつらさを口にしているが、島の素晴らしさを讃えてもいる。しかし手紙の続きは島のその素晴らしさを描写しないで、蚤の多さや排泄物の匂いなどの島の「不潔」な側面ばかりを強調し、奇妙な印象を与える。この奇妙さは、ほぼ同時期に書かれたシュルレアリストの友人ロラン・チュアルへの手紙においてより鮮明に現れる。ここでも同様にプローチダの印象が綴られているが、この手紙はどうやら出版を意図するチュアルの求めに応じて書かれたものであり、求められているのは旅先の描写ではなく、『リヴィエールとの往復書簡』風の病の告白のようである。手紙は二部構成になっており、前半部は病の記述に割かれ、旅行に関する言及はない。一方、プローチダへの言及は一度署名された後に続く後半部において初めてなされ、その後再度署名がされている。ところが、このように分割された構成を取りながらも、病と旅の記述は一つ手紙の中で互いを反映し合っているように見える。たとえば病について書かれた前半部には、「僕は吐き気を催す不潔な塩水に浸かっているような気分がしていて、そこでは全てが固まって猛威を振るい、まさに荒廃の様相を呈するのだ(…)」とあるが、この「吐き気を催す不潔な塩水に浸かっている」気分とはジュニカへの手紙でも書かれていた旅先の「不潔」な印象が滑り込んできたかのようである。一方、プローチダについては次のように書かれている。

おかしい告白じゃないか、この手紙は。イタリアでラマルティエヌとともに魅惑的な土地にいる男としてみては。ここではレモンが枝に垂れ下がり、女たちは金色の飾り紐をつけた

緋色のマントを肩にかけている。しかしここではまた、人々は糞の中を歩いて、老婆たちは昼の二時から蠟燭を灯して連祷を唱えている。死者は担架で担がれて、埋葬は一様に体に白いラシャを巻き付けた盲信家の一団を伴って行われる。そして虱は頭の上を、南京虫は皿の中を走り回り、女たちは五十才で孕むんだ<sup>(6)</sup>。

冒頭では病の描写との対比が強調される。今しがた病の苦しみを告白したばかりの男は、色鮮やかな異国の地にいるのだ。しかし、奇妙なことにこの鮮やかさはすぐに色褪せて、汚濁と死を想起させる暗澹たる光景が取って代わる。個別の主題として取り上げられるはずであった病と旅先の光景はアルトーのベンの下で連絡し合い、病の苦しみが異国の地の鮮やかさを浸食してしまっているかのように見える。病はこのように彼の旅先についてきてその存在を主張するのだ。

## 2. 砂漠の体験

同時代の多くの作家たちと同様にアルトーもまた、異郷、とりわけヨーロッパの外の国々に早くから関心を持ち、これらの国々を題材にしたテキストをいくつも残していることはよく知られている。西洋の近代医学がいっこうに改善をもたらしてくれない病に苦しむ彼には、まだ訪れたことのない遠い異郷の大地や文化はその苦しみからの一つの抜け道を表していた。少年時代に家族とともに母の出身地であるスミルナでヴァカンスを何度か過ごしたことを別にすれば、アルトーがヨーロッパの外の土地と初めて接触するのは、1934年6月に映画『シドニー・パナシュ』の撮影のためにアルジェリアを訪れた時のことになる。もっともフランスの植民地となっていたこの国で既に欧風化が進んでいたアルジェ周辺の地域は彼の感興をそそることはない。しかし、撮影地となったサハラ砂漠北方のオアシス・ラグアトでの滞在は彼に強烈な印象を残しており、その後の彼の旅への憧憬に決定的な役割を果たしたと考えられる。この滞在から現在残されている手紙は僅かだが、その中でもジャンヌ・リデル宛の手紙は彼の異郷体験を知る上で極めて興味深い。

砂漠との接触は、アルトーに単なる地理的な移動というよりも異なる時間の流れの中に入っていく印象を与えている。手紙の中で彼は、「事物は時間の中に、動くことなく、自分自身に絶対的に忠実なままに保たれることができる」と書いている。砂漠は、西洋での生活が日々事物の回りに重ねる嘘や幻影を焼き尽し、全てを剥き出しにし、ありのままの姿を取り戻させる。この作用は、そこに足を踏み入れた者にも大きな変容をもたらす。アルトーはそこでかつてない充足の感覚を体験している。

(…) 生は潤滑に運行し、私たち自身を恐るべきそして純粋な強<sup>・</sup>さの段階にまで高めることができるのです。性欲もなく、いかなる類いの淫らさもなく、欲望もない。というのも欲望

は自らを消尽させ、そして自ら焼き尽しながら私たちに燃やすのですから。これこそ精妙な錬金術、砂漠が私たちに課す教訓なのです。情念を成す全てのもの、私たちが投影によって卑しい形体を与えている、愛を成す全てのもの、他の存在との接触において私たちに決定的に見える全てのもの、こうしたもの全てが、力を、魅力を、魔力を増しつつも、開放され、瀉出され、副次的存在を、分身を消し去り、強者だけを養う孤独の中で私たちを生かしうることを人は感ずるのです<sup>(7)</sup>。

性愛に関する言及が見られるが、アルトーが自身の病、自身の不完全さを性的な問題と結びつけてきたことを考え合わせる必要があるだろう。『ヘリオガバルス』において少年皇帝が自身の身体において男性原理と女性原理を統一することで原初の状態に回帰しようとしたように、アルトーはしばしば彼の愛する女性たちとの関係の中に自らの充足と治癒の可能性を見ようとする。しかし、彼の求めるような完全な関係は無理解や裏切りによって妨げられる。一方で、ここでのアルトーの充足は、自らの不完全さを他者によって補うのとは逆に、あらゆる幻影や妄念が焼き尽された後に自らの孤立を見出すことから得られるものである。砂漠の灼熱は彼の苦痛をも抽象し、本来あるべき自己を取り戻させる。

宛名人のジャンヌ・リデルに関しては今日も詳細は不明なままである。彼女に送られたこの手紙はある種のラブレターと読めなくもないが、少なくともアルトーがこれまで書いてきたラブレターとは性質を異にする。彼のラブレターを通して現れる特徴の一つは、手紙を介して愛する人との距離を縮めようとする接近の欲望であり、ときとしてそれは暴力的なまでの表現に達することもある。しかし、この欲望は手紙の中で成就されることはないし、そこにラグアトの砂漠で彼が得たほどの充足感が表明されることはない。手紙はそもそも距離があるゆえに書かれるのであり、接近の欲望は欲望のままである。手紙はむしろ距離を開くために、たとえば『神経の秤』所収の「私信」のように恋人を罵り、苦痛をもたらす接触を退けるために書かれるときに、その力をより発揮すると言えるかもしれない。ジャンヌ・リデルへの手紙の中でアルトーは彼女を砂漠へ来るよう誘っているが、それは彼女を自身に近づけるためというよりも、この空虚な砂漠で彼女もまた一人さまようことを提案しているに過ぎない。距離はこの場合、彼と宛名人との接近を妨げるものとしてではなく、彼を外世界の煩わしい欲望や幻影から保護するものとして機能している。手紙の末尾でアルトーは次のように書いている。

事物がついに崩壊するのを目撃しながらも、自らがその潰走の主であることを知っている死の本物の旅人のように世界を見直すことを学べば、人はそのとき究極にして堅牢な安全と本当の幸福の間近にいるのです (…)<sup>(8)</sup>。

旅行書簡は、遠い異郷にあることを伝えることで、距離を鮮明にする。この距離が本来の私の姿を見出すために必要なものであるとするなら、旅行書簡そのものもまた一つの砂漠の体験である。

この幸福な体験はこれで終わったわけではない。アルトーは帰国してしばらく後に、ポーランドに送った手紙の中でアルジェリアでの滞在を振り返りながら、「私は気候のために恐ろしいぐらゐ消耗し衰弱してしまい、何も書きませんでした<sup>(9)</sup>」と書いている。リデルに宛てた手紙はラグアトに到着したばかりの頃に書かれていたのだが、彼を苦しみから救った砂漠の体験はつまりは一時的なものであり、結局はいつもの旅の疲れと、そしておそらくは砂漠の体験そのものの反動によって、彼は苦しめられることになったのである。しかし、ポーランドへの同じ手紙の中で彼は砂漠への讃美を忘れてはいない。アルトーはこの後自らの意志でメキシコとアイルランドへの二度の旅行へ立つことになるのだが、それはラグアトでの砂漠の、すなわち距離の体験の再現を目指しての旅立ちではなかっただろうか。彼は再び砂漠に足を踏み入れることはないものの、メキシコシティーにおいては先住民文化の調査のために砂漠に出かける計画について語り<sup>(10)</sup>、アイルランドの旅路では「杖を手に砂漠で悪魔たちと戦った<sup>(11)</sup>」キリストの姿に自らを重ね合わせることになる。

### 3. 距離の演出

1936年1月10日、アルトーはアントワープから客船 S.S. アルベールヴィル号に乗りメキシコへ向けて旅立つ。出発に際して彼は母に客船の写真が印刷された絵葉書を送り、アランディ医師と後にその妻となるコレット・ネル＝デュムシャルに宛てた手紙の中でもこの客船について描写し、出発を視覚化している。同じ手紙の中で彼は、「運命が私に語りかけないわけではない、という気がしています<sup>(12)</sup>」と、このメキシコ旅行に抱く強い期待を明かしている。彼がこの旅において期待するのは、進行中のメキシコ革命とともに復権しつつあると聞くインディオ文化の中に現在の自らの窮状を脱し新しい道を切り開くための秘密を見つけ出すことである。旅先から彼が友人たちに送る手紙は、彼が確かにこの新しい道に足を踏み入れようとしていることを繰り返し、彼らと遠く隔たりつつあることを強調している。その言葉は、ただ地理的な距離が広がりつつあるという以上に、彼が異なる次元に踏み込みつつある印象を与える。

1月30日、船はハバナに寄港する。アルトーは到着の翌日にポーランド、バルテュス、ジャン＝ルイ・パローに宛て旅費の無心を目的とした手紙を書いているが、そこには彼の期待が確信に変わりつつあることが表明されている。バルテュスには「昨日ハバナに着きましたが、新しい違う世界がそのエネルギーをここまで送っているのを私は多くの徴に見たに違いありません<sup>(13)</sup>」と書き、パローに宛てては「ハバナに着くや否や、私は新しい流れに突入しました<sup>(14)</sup>」と書いている。

2月7日、アルトーはバラクルスを経てメキシコシティーに到着する。この町での滞在は、記

録のない細かな移動を別にすると、シエラ・タラフマラ山中に出発する8月末まで続くことになる。到着したその日、アルトーは占星術によって引き出された彼の運勢に関して書かれたアランディ医師からの手紙を受け取り早速彼に返事を書いているが、その中で医師の明察が「私を取り巻いている素晴らしさ<sup>(15)</sup>」をなぞっていることに驚いてみせる。ポーランに宛てた5月21日付の手紙にも「ここでは途方もないものがうじゃうじゃしていて、驚異を摘み取るにはしゃがむだけで十分です<sup>(16)</sup>」とある。これらの記述だけを読むと、アルトーがメキシコシティーにおいて日々高揚の中で過ごしていたかのように見える。しかし、彼がこの町で過ごした六ヶ月ほどの間に町の素晴らしさについて語ることは僅かである。彼のメキシコとの最初の接触は、よく知られているように、むしろ失望をもたらした。

アルトーは、少なくとも進行中の革命とメキシコシティーでの生活の中には、期待していたようなインディオ文化の復興に立ち会うことはほとんどできなかった。彼がそこで見たのは、『革命のメッセージ』所収のあるテキスト中の辛辣な表現を使うと、「ヨーロッパ文化の屍<sup>(17)</sup>」であり、3月26日にポーランに書いた手紙の中にも同様の落胆が表明されている（「彼らは文化の面ではアメリカとヨーロッパを追従しているのです。そんなものを見つけにメキシコまでやってきたとは、嘆かわしいものです<sup>(18)</sup>」）。落胆の原因はとりわけ知識人たちの間に広まっていたマルクス主義思想にあり、メキシコシティーで行った講演では彼は何度もこの潮流に批判の矛先を向けている。彼が求めていたのは単なる社会革命ではなく、「人間」の概念そのものを変革するような革命だった。一方、メキシコシティーで彼が送っていた生活もパリでの生活と何ら変わるものではなかった。滞在中彼の支援をしていたルイス・カルドサ・イ・アラゴンの証言<sup>(19)</sup>に従えば、アルトーは日々カフェのテーブルで滞在の資金を稼ぐための記事を執筆しては、しばしば麻薬を入手するために評判の悪い区域を徘徊していた。彼が送る手紙もまた、計画が順調に進み新たな世界に足を踏み入れていることを強調しつつも（「私のここでの生活は奇跡の様相を帯びている、と言えましょう<sup>(20)</sup>」）、パリでの日常と変わらない苦々しい現実を垣間見せる。ポーランへの手紙ではいっこうに進展しない『演劇とその分身』の出版を催促し続け、いくつかの手紙では明るい展望を披露していた資金繰りも好転することなく、6月17日のバロー宛の手紙では「四ヶ月来信じられないほどの財政的苦境の中で戦っているんだ<sup>(21)</sup>」と打ち明けて無心することを余儀なくされる。4月18日のマリー・デュビュック宛の手紙では、アルトーはこの状況を「地獄の戦い<sup>(22)</sup>」と呼んでいる。

この状況の中でアルトーにはインディオの文化との直接的な接触のための調査旅行の実現が唯一の希望であり、彼の旅行の成否の全てはその一点にかかることになる。4月2日のルネ・トマ宛の手紙の中で彼は調査旅行の計画について初めて言及し、「私は不可能なものを求めて出発します<sup>(23)</sup>」と書いている。この段階で行き先はまだ決まっておらず、手紙にも具体的な説明はないが、彼が求めているものは、それが明らかになったときにはルネ・トマが「神々がいる」と思

うような類いのものだと、アルトーは言う。以後の手紙の中でも彼は、計画の進捗状況とその実現への希望に繰り返し言及する。たとえば、6月17日付のバロー宛の手紙では彼は「私には見つけなければならない重要なものがあるのです。それを見つけた暁には、私は自動的に本物のドラマを実現することでしょう。私は今度こそそれを確実に成功させなければなりません<sup>(24)</sup>」と書いている。この「本物のドラマ」は積年の彼の「不運」にケリを付けてくれるはずである。アルトーの手紙はさらなる遠方に向けて彼の希望を投影し続ける。遅々として進展しなかった計画が急転し、その実現が間近に迫っていることを彼は7月10日のバロー宛の手紙に記しているが、これがシエラ・タラフマラ山中への出発前の最後の手紙となる。

#### 4. 曖昧な儀式

1936年9月にシエラ・タラフマラ山中で過ごしたひと月はその後のアルトーにとって極めて重要な体験になったと言ってよい。それは彼が最晩年にいたるまでこの体験、中でもそこで立ち会ったペヨートルの儀式を取り上げたテキストに何度も取り組んでいることから明らかである。ところが、この体験の内実は決して明瞭なものではなく、たとえばル・クレジオが「メキシコの夢」の中でアルトーの調査旅行そのものの信憑性を疑問に付していることはよく知られている<sup>(25)</sup>。タラフマラ族の居住する地域までは非常に困難な道中である上に、調査旅行は国立美術館から援助を受けていたと言われるものの、その事実を記録する公的文書も発見されていない。手紙とは言えば、下山後の10月7日にチワワからポーランに宛てた手紙<sup>(26)</sup>が一通残されているばかりである（現在読むことができる中ではメキシコからアルトーが書く手紙はこれが最後になり、次に確認できる発送は帰路ハバナから妹に送られた11月3日付の絵葉書である）。手紙には、調査旅行については一言もなく、ただ『演劇と分身』の出版について心配する言葉だけがある。さらにアルトーがタラフマラ山中での体験について書いたテキストのあまりに空想的な内容もまたこの疑念に拍車をかける。その一方で、タラフマラ族の間にスペイン語普及のために当時派遣されていた教師が現地でもアルトーを想起させる奇妙なフランス人詩人を見たという貴重な証言も報告されているが<sup>(27)</sup>、真相は藪の中であり、全ての事実を確認する手だてはないだろう。もっとも、重要なのは事の真偽ではないと唱えることは後世の読者にとって穏当な主張だと言える。ル・クレジオのようにアルトーのテキストを詩人による夢として読む立場を人は取ることができる。しかしながら、長年病の真実性に対する疑念に苦しめられてきたアルトー自身にとって、この疑念は彼の存在そのものに関わる問題だったはずである。また、現実を訴えるために適した手段だと彼が考えていた手紙がここでほとんど残されていないという事実は、その意味を考えてみるに値する問題であるかもしれない。

タラフマラ山中での体験に向けられた疑念は、アルトーの帰国直後にすでに始まっている。彼はメキシコで『エル・ナシオナル』紙のためにすでに書いていた調査旅行の報告（「記号の山」、

「東方の三博士の国」、「アトランティスの王たちの儀式」、「原理の種族」)のいくつかを、『N.R.F.』誌でも発表するためにポーランに見せているが、インディオの生活・風習をエゾテリズムと結びつけて解釈するこれらのテキストの奇抜さにポーランが眉を顰めたことは疑いない。疑念を抱くポーランに対して、アルトーは1937年2月4日付の長い手紙で、自身が山中で見た光景を再び解説し、報告の内容が事実に他ならないことを強調する。

私は東方の三博士の出現をでっちあげたのではありません。それは絵に描かれた国々のように作られた一つの国によってつぶさに私に与えられたのです。絵に描かれた国々はもちろん無から生まれてはいません。私は完全な空想というものを信じません。つまり、無から何かを作り出すような空想のことです。いかなる心的イメージも私にはどこかで実際に体験されたイメージから切り取られた部分として現れないようなものはないのです<sup>(28)</sup>。

手紙の末尾ではアルトーは「効力の見地から」この旅行について話していると主張する。つまりは、この体験が絵に描いた餅ではなく、現実に対して意味を持つものでなくてはならないのだ。それゆえこの体験の信憑性が疑われることは彼には我慢がならないのであるが、しかしながら、体験の意味がアルトー本人に自明であったかというところとも言えない。

アルトーがタラフマラ山中での自らの体験の持つ意味を明確にしかねたことは、おそらくは彼が最晩年までこの体験に立ち戻り新たなテキストを産出し続けたことにも反映している。彼にとって決定的であるべきはずのものは、その決定性を欠いていたのだとも言える。このことはすでに、帰国後に『N.R.F.』誌掲載のために新たに書かれた「ペヨートルのダンス」がメキシコで書かれた四つのテキストとは全く異なる性質のものであることから見て取れる。アルトーは、「ペヨートルのダンス」執筆中の2月27日、ポーラン宛の手紙の中で「私は今になってようやく自分が言おうとしていたことを垣間見ることが出来ます<sup>(29)</sup>」と書いている。では、「ペヨートルのダンス」はそれまでのテキストとは何が異なるのだろうか。すでに書いたように、メキシコで書かれたテキストはタラフマラ山中でアルトーが見た光景のエゾテリズム的解釈に終始していた。そこに欠けているのはアルトー自身である。一方、「ペヨートルのダンス」で彼は山中での体験を自身を中心に組み立て直している。そして、そこで前景化されるのは苦痛である。冒頭だけ見てみよう。

物理的拘束はまだ続いていた。この動乱は私の体そのものだった…。二十八日間待った末に、私はまだ自分自身の中に帰ってはいなかった。いや、自分自身の中に出る、と言うべきか。自分自身の中、この籬の外れた寄せ集め、この傷んだ地質の欠片の中に<sup>(30)</sup>。



「ペオートルのダンス」は、これまで病の苦痛について繰り返し語ってきたアルトーの中でも、とりわけ痛ましいテキストである。歩みの一つ一つが痛みを伝え、内なる苦しさが一つの風景そのものになる（「下手にかき集められた器官のこの堆積、それは私であり、私はそれに、氷からなる巨大な景観が今まさに崩壊しようとするのに立ち会うように、立ち会っているような気がした」）。アルトーの旅には常に病が伴い、道中がその苦痛を増幅させることは始めにも見たが、ここでは旅そのものが苦痛と一致する。

ここで我々の本来の主題である手紙のことに話を戻そう。アルトーはタラフマラ山中での調査旅行中、なぜ一通の手紙、それも調査旅行には一切言及のない手紙しか残さなかったのだろうか。もちろんそこには郵便事情やその他の物理的事情もあったと考えられる。しかし、その理由を極度の苦痛と、そのためにこの体験のもたらす意味を掴みえなかったことに求めることは不自然ではないと思う。ところでこの体験のもたらす意味は、「ペオートルのダンス」によって過去に例のない苦痛を前景化することで明瞭になったわけではない。ポーランの手紙にもあるように、アルトーはこのテキストを書くことでこの体験の意味を「垣間見」ただけである。そもそも彼にとってこの体験が意味を持つものであるとすれば、それは彼の苦しみに終止符を打つということだ。しかしながら、タラフマラ山中での体験の中核に位置づけられるべきペオートルの儀式はアルトーにいかなる充足を与えることもなく、彼の苦痛を極限にまで至らせるのみである。「ペオートルのダンス」で描かれる彼は、儀式の後には一人では馬の背に乗ることもできないほどに憔悴している。そして、もしこの体験が意味を持つものであるならば、それはこの極限の苦痛の見返りとしてであると、アルトーは言う。「この先、この何かが、この重く打ちひしぎ、暁を夜と同じにしてしまう粉碎の背後に隠されている何かが、外へ引っ張り出されねばならなかった。それは役立たねば、まさに私の磔によって役立たねばならなかったのだ<sup>(31)</sup>」。バロー宛の手紙の中で言われていた「本物のドラマ」はタラフマラ山中での体験によっては実現されていない。それが実現されるためには、極限の苦痛が意味するところを自ら掴み取り、外の世界へはっきりと示す必要がある。手紙はそのための手段、あらゆる意味で遠く離れた世界での出来事を現実世界に伝えるための手段となる。いやむしろ、タラフマラ山中において「本物のドラマ」を実現することができなかったのは、あたかも手紙を書くことができなかったためであるかのように、手紙はこのドラマを実現に導くための舞台となるのである。

## 5. 焼失への旅路

1937年8月12日、アルトーはル・アーヴルからアイルランドへ向けて船出する。二日後コーヴに上陸し、その後およそ四十日の間この国を巡歴する。いったい彼は何のためにアイルランドへ出かけたのか。その理由には諸説あり、それに決定的な答えを提示することは不可能である。8月6日にパリのアイルランド公使館に旅への援助を依頼するために送った手紙<sup>(32)</sup>の中では、彼

はアラン諸島の習俗に関する著作もある劇作家ジョン・ミリントン・シングの名前にも言及しながら、「太古からの伝統の原泉」を探すことを旅の目的として説明しているし、8月23日イニシュモア島キルロナンから家族に宛てた手紙では「ドルイド僧たちの最後の末裔を探しています<sup>(33)</sup>」と書いている。しかし、聖パトリックのものともイエス・キリストのものとも称する杖を手に世界の崩壊を予言する彼の姿は、古代ケルト文化への関心だけからは説明することはできない。ここで唯一言えることは、それはなぜアイルランドかという問題を一切説明するものではないが、アルトーは手紙を書くために、すなわち遠方から「本物のドラマ」が実現される過程を手紙によって伝えるために、旅立ったということである。四十日間という期間はタラフマラ山中への調査旅行の期間とほぼ一致するが、メキシコでの調査旅行の期間中にはただ一通だけ残されている手紙は、アイルランドからは長短合わせておよそ二十通が残されている。これはメキシコ旅行期間中に残されている手紙の総数よりも多いのであり、アルトーが異例の頻度で手紙を書いたことは明らかである。

「本物のドラマ」は、第一に新たな、あるいは本来あるべき自己の到来、誕生のドラマであり、それはちょうどアルトーがメキシコからの帰国後にタラフマラ山中での体験を再考し始めるのと期を同じくして始まっている。2月4日のポーランへの長い手紙を書くちょうど一日前、アルトーは恋人セシル・シュラムに宛てて、「私は今や知っています、私が誰であるか、私がこれから何をするのか、なぜ私が生きており、なぜ生まれたのか、ということ<sup>(34)</sup>」と書いている。さらに5月の末には、「ペオートルのダンス」を含む「タラフマラ族の国への旅について」の『N.R.F.』誌での掲載に関して、彼はポーランに自身のテキストに自らの名前で署名をしないことを宣言する。本来の自己の到来とともに、現在の彼の名前はもはや指示するものをなくすからである。「間もなく私は死ぬか、もしくはいずれにせよ名前を必要としない状況に置かれるでしょう<sup>(35)</sup>」。そして、アイルランドからアルトーが送る手紙は、新たな誕生に先立つ自己の消失のための舞台となる。

アルトー自身の変貌は、外の世界にも投影される。7月28日に匿名で発表された小冊子『存在の新たな啓示』で彼は近い将来に起こる世界の崩壊を預言するが、同時期より友人たちに宛てた手紙の中でも預言を繰り返し、警鐘を鳴らし続ける。世界は確かに戦争の時代に突入しつつある。しかし、そんなことは起ころうとしている事態の一部に過ぎないのであり、崩壊はより深い位相で進行しているのだと、彼は言う。それは、あらゆる形象の焼失である。アルトーは、当時彼の最もよき理解者と考えていたアンドレ・ブルトンに預言を次のように解説している。

それはつまり、〈世界〉はその終焉に達しており、〈生〉のあらゆる形象は死滅する、そして唯一の解決策はというと、私たちはそこに〈休息〉を発見することを夢見たわけでしたが、それは形象の廃棄である、ということです。すなわち、私たち全ての〈精神〉がある絶対的

な要求に直面しているのであり、〈休息〉がついに始まるためには〈精神〉はこの要求を絶対に実現しなければならない、ということです。それはすなわち、〈火〉が死滅させるであろう、ということであり、なぜならば、〈火〉が〈目に見えないもの〉から出たからであり、目に見えない火は〈生〉がそこで惑わされてしまったところの形象を死滅させるためにしか決して〈目に見えるもの〉の中に出たことはなかったからなのです<sup>(36)</sup>。

あらゆる形象を燃やし尽くす火とは、アルトーの体の内で猛威を振るう苦痛である。この世界的な災厄に先立ち彼は犠牲となり自らを燃やし続けてきたが、止まるところを知らない退廃に終止符を打つために世界の焼尽を先導する者となる。「私が私の人生の全てを燃やしてきたように、また今現在も燃やしているように、燃やすことを受け入れることは、すなわちまた燃やす力を手に入れることなのです<sup>(37)</sup>」。焼尽の果てにあるのが休息であるのならば、それは自らの苦痛を苦痛そのものによって焼き尽した後に、本来あるべき自らを見出すということになる。

この焼尽はラグアトにおける砂漠の体験の再現と言えるだろう。つまり、焼尽とは距離の体験である。アルトーが再び距離を取ることに、つまりは旅に出ることに駆り立てた大きな要因の一つにセシル・シラムとの結婚の計画の頓挫があったことは間違いない。その直後にマリー・デュビュックに宛てた手紙では、「世界のあらゆる力が私の内に集まるように自らを世界から切り離すこと<sup>(38)</sup>」へと全てが彼を導いていると書いている。アルトーはセシルとの結びつきの中に自らの再生の可能性を見ていたが、それが失敗に終わると、その反動であるかのように、あらゆる物理的また世俗的な性の接触を退けるのに躍起になる。それは彼の計画を破綻させるものである。ダブリンからアニー・ベナールやルネ・トマに送った手紙では、彼に結婚の話があったことを誰にも口外しないよう念を押し<sup>(39)</sup>、またアイルランドへ旅立つ直前に知り合った女性ジャーナリストのアンヌ・マンソンに彼はただならぬ愛情を示すが、彼女が「非人間的な〈愛〉」に用心ができない限り彼と共にいることはできないと書く。「私と共にあるということは、他の全てを捨てることです<sup>(40)</sup>」。

アイルランドへのアルトーの旅立ちとは、彼を惑わすあらゆる形象から距離を取るための、形而上的世界への旅立ちである。残された手紙は、彼の足取りがコーヴ、ゴールウェイ、キルロナン、そしてダブリンへと向かったことを私たちに教えてくれるが、これらの地で彼がどのような景観の中を通り過ぎたのかということにはほとんど言及がない。現地環境については唯一8月23日にキルロナンからブルトンに宛てた手紙で町についての素っ気ない説明があるだけで、その他は預言的言辞に満たされているのである。外世界に破壊の予感を広げていく一方で、手紙はアルトー自身の身体的苦痛を抽象化し、彼の存在そのものの変貌に読む者を立ち会わせようとする。9月5日にブルトンに宛てた手紙の末尾には「私が自分の〈名前〉で署名をするのもそろそろ最後です。その後は別の〈名前〉になるでしょう<sup>(41)</sup>」とあり、同14日にはダブリンからアニー・

ベナールとルネ・トマに宛てて彼は「私はじきにもうアントナン・アルトーと名乗ることはないでしょう。私は別人になっていることでしょう<sup>(42)</sup>」と書く。同日に彼はアンヌ・マンソンに宛てても「何日か（二十日ほど）後には私は〈神自身の名において〉公に語るでしょう<sup>(43)</sup>」と書いている。この日を境に彼の署名は簡略化されており、17日と21日付のブルトンの妻ジャクリーヌ宛の手紙にはもはや彼の名前は無い。そして、今日残るアルトーがアイルランドから書いた手紙はそこで途絶える。彼が何らかの形であらゆる形象の崩壊に立ち会い、そこに本来の自身を発見したかどうかは、知りようがない。事実は知られているように、彼は23日にダブリンで逮捕され、手紙を書ける状況ではなくなったということだけである。

アルトーがアイルランドから書く手紙は、手紙という媒体が持つ極限の状態を表していると言える。これらの手紙は、事物がまだ形象を持たない形而上的彼岸が現実世界に展開されるための通り道であり、形象の焼尽をそれ自体において実践しようとする。ブルトンに託された9月5日付のリーズ・ドゥアルム宛の呪符<sup>(44)</sup> (Sort) は、後にヴィル＝エヴラルの精神病院から送られるいくつもの呪符を予感させるものだが、中央に煙草か何かによって燃やされた穴が開いており、紙そのものの形象がすでに攻撃に晒されていることを感じさせる。もっとも全ての形象が焼尽する暁には、送り主も宛名人もその身体を失い、後にアルトーがロデーズの精神病院で書く手紙の中で夢想するような魂の交感が手紙に取って代わるのかもしれない。しかし、手紙は書かれ続ける。ダブリンでの逮捕から五ヶ月後の1938年2月、フランスに強制送還されたアルトーはソットヴィル＝レ＝ルーアの精神病院からパリのアイルランド全権公使に宛てた手紙<sup>(45)</sup> を書き、逮捕の不当性を訴え、即時開放のための介入を要求している。形而上的彼岸を求めて出発した旅は、物理的な身体の拘束という皮肉な形で自己の消失を成し遂げる。それは、以前の旅において手紙を書くこともできないほどに苦痛に押し潰された姿に似ている。アルトーの旅は、ある意味では1946年にロデーズの精神病院から開放されるまで続いている。手紙を書くことは、絶えず彼にとって重要な表現行為であり続けるが、それは物質的世界の彼方に本来の自己を求めるためのものではなく、苦痛によって焼き尽されてなお残存する自らの灰を掻き集めるためのものである。

#### 注

\*アントナン・アルトー (Antonin Artaud) の以下の著作は略表記する。

OC = *Œuvres Complètes*, Paris, Gallimard, 1956-1994.

LGA = *Lettres à Génica Athanasiou*, Paris, Gallimard, 1969.

\*引用文中の強調は全て原文通りである。原文中斜体字にされている語には傍点、大文字表記の語には下線を施し、頭文字が大文字で表記されている語は〈 〉に入れて訳出する。

(1) Gérard de Nerval, *Œuvres Complètes*, Paris, Gallimard, 1989, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 1, p. 1387.

(2) OC VIII, p. 288.

(3) Florence de Méredieu, *Antonin Artaud, Voyages*, Paris, Blusson, 1992, p. 7.

(4) LGA, p. 39.

- (5) Cf. *Ibid.*, p. 187.
- (6) OC I ★★, pp. 120-121.
- (7) OC III, pp. 291-292.
- (8) *Ibid.*, p. 292.
- (9) OC VII, p. 153.
- (10) Cf. OC V, p. 207. 1936年5月21日付ジャン・ポーラン宛の手紙。
- (11) OC VII, p. 206. 1937年9月5日付アンドレ・ブルトン宛の手紙。
- (12) OC VIII, p. 302.
- (13) *Ibid.*, p. 304.
- (14) *Ibid.*, p. 305.
- (15) *Ibid.*, p. 307.
- (16) OC V, p. 206.
- (17) OC VIII, p. 236.
- (18) *Ibid.*, pp. 308-309.
- (19) Cf. Luis Cardoza y Aragon, « Pourquoi le Mexique », in *Europe*, n° 667-668, novembre-décembre 1984.
- (20) OC V, p. 198. 1936年4月23日付ジャン・ポーラン宛の手紙。
- (21) OC VIII, p. 312.
- (22) *Ibid.*, p. 311.
- (23) *Ibid.*, p. 310.
- (24) *Ibid.*, pp. 312-313.
- (25) Cf. J. M. G. Le Clézio, « Antonin Artaud, le rêve mexicain », in *Europe*, n° 667-668, novembre-décembre 1984.
- (26) Cf. OCV, p. 209.
- (27) Cf. Christian Baugey, « Traces retrouvée du séjour mexicain », in Odette et Alain Virmaux, *Artaud Vivant*, Paris, Nouvelles éditions Oswald, 1980.
- (28) OC IX, pp. 101-102.
- (29) *Ibid.*, p. 107.
- (30) *Ibid.*, p. 40.
- (31) *Ibid.*, pp. 49-50.
- (32) Cf. Olivier Penot-Lacassagne, *Vies et Morts d'Antonin Artaud*, Paris, Christian Pirot, 2007, p. 171.
- (33) OC VII, p. 202.
- (34) *Ibid.*, p. 159.
- (35) *Ibid.*, p. 180.
- (36) *Ibid.*, p. 186.
- (37) *Ibid.*, p. 189.
- (38) *Ibid.*, p. 175.
- (39) Cf. *Ibid.*, p. 217 et p. 219.
- (40) *Ibid.*, p. 194.
- (41) *Ibid.*, p. 209.
- (42) *Ibid.*, p. 220.
- (43) *Ibid.*, p. 218.
- (44) Cf. *Ibid.*, p. 209.
- (45) Cf. *Œuvres*, Paris, Gallimard, 2004, « Quarto », pp. 849-851.

